

二千年の歴史、岡山の魅力

日本先史古代研究会会員 楠 敏 明

歴史の重み

「4,000年の人間の歴史の重みを感じて生きてくれ」と法学の最終講義で教授が話された。あれから半世紀近い。当時はその歴史を変えてやろうという心意気であったが、一人の力ではどうなるものでもない。いや、むしろ二千年の歴史が息づいている岡山に生まれたことを誇りにさえ思えるようになってきた。

国際協力事業団の仕事でバルカン半島にあるマケドニアのある都市へ行った時、案内の水道局長が「ここは第1次世界大戦の広島です」と説明された。第1次世界大戦はバルカン半島での1発の銃声が始まったと学校で習った。確かにその町は旧市街と新市街とがちぐはぐな感じがした。当時、私は広島に住んでいた。広島は原爆の被害から立ち上がる最中で、歴史を感じさせるものはほとんどない新しい街へ生まれ変わらざるをえなかった。旅をして、歴史を感じさせない町ほど味気ないものはない。

古里、岡山は人が生き返り、生まれ変わりして今日の姿をなしている。連綿として続いていることがあちこちで見られる。それがまさに歴史の重みである。

真っすぐな道はさみしい

山頭火の句に「まっすぐな道はさびしい」という自由律俳句がある。札幌の大通り、広島の平和大通りは真っすぐである。が、岡山の桃太郎大通りは少しづつ歪んで岡山駅から城下へ通じている。札幌の大通りは何もない北の大地に作られた。広島の平和大通りは原爆で歴史を消された焼け野原に作られた。これに対し、桃太郎大通りは談合に談合を重ねて、四百年余をかけて出来上がった。そのため、すこし歪んでいる。そこに私は歴史を感じる。人の営みを感じる。

文化のない街づくり

新幹線で広島の街への入口でまず目に映るのは山肌を削ってできた墓地である。また、平和大通りにある白神神社の隣に20数階のホテルがあり、原爆ドームのすぐ近くにそれを見下ろすマンションが建てられようとしている。バイタリティーと見るべきか、生きんがための経済活動とみるべきか。神も原爆で倒れた御霊をも畏れない諸行というべきか。少なくとも岡山県人としては受け入れ難い状況である。広島は原爆投下により外から入ってきた人も多い。あるいは広島を古里にしない人達の仕業かもしれない。

かつて広島大学学長を務めた頼実先生に聞いたことがある。「岡山は史跡の保存とかにお金をかけるが、広島は都市計画で古い建物をすべて壊している。これは原爆を落とされたせいですか」と。すると、「岡山は戦前から文化的なものに金をかけ、広島はそうではなかった。」という返事が返ってきた。県民性というべきか、歴史の所産というべきか。

歴史に学ぶ、動、植物に学ぶ

最近、新しい商品開発において植物や動物に倣うことが一つの流行になりつつある。(バイオミミクリ、生物の模倣といわれている。) 動、植物は何万年、何百万年と生き続け、環境に適応して生き延びてきた。そして現在に至っている。それだけにいろいろの進化、適応が隠されている。それを新商品に

応用しようとしているいろいろ研究、開発が行われている。それをまねてできたのが撥水性のある衣服の開発であり、痛みの少ない注射針等である。万物の霊長といわれる人間が動物や植物にあるべき姿について教えを乞うという形になっている。

長い年月の風雪に耐えたものが現在に残っていると見るべきであろう。歴史を学ぶ原点はそこにある。

自己実現のできる町

人類も長い間、生きんがため、食わんがための労働を強いられてきた。わが国においても20世紀の後半になってやっと生活環境が豊かになり、なじまない労働をしいられることが少なくなる社会へとなりつつある。努力をすれば、自己実現がかない、それが生きがいとなりうる社会になりつつある。その自己実現ができる町こそが都市の魅力になりつつある。これからの街は自己実現ができやすい街か否かが魅力ある街の判断指標になるのではないか。それは子供にとっても成人、そして老人にとってもである。

岡山の魅力

街の魅力はなにであろうか。ビルが多いこと、ビルが高いことであろうか。私はしばしば都市の駅前に立ち降りて考える。少なくとも岡山の駅前には目を塞ぐビル群はない。これが岡山の魅力と私は考えている。文化を英語ではカルチャーという。カルチャーとは本来耕すという意味である。岡山は二千年をかけて人々が耕してきた結果が現在のありようである。それはビルが主役でなく、速さが主役でなく、効率が主役ではない。それが岡山である。のんびりとして、大陸的で、質素で、決して派手ではないが、それでいて耕されていると感じる、感じさせられる文化の香りがするのが郷土、岡山である。かつて、吉備の国と呼ばれていた地域のあちこちに数多くの遺跡、遺構があり、その雰囲気醸している。二千年をかけて営々と築き上げてきた先人たちの息づかいが感じられる。それこそが岡山の魅力と考える。



楯築遺跡にて 古代衣装で案内スタッフ一同 筆者は前列右から2人目
筆者は楯築遺跡のある集落に在住で遺跡の管理・整備等をなさっています。